

## 言葉と心のあいだ

榎場 雅子

（臨床心理士・精神保健福祉士）

「今年も、もう 12 月ですね」こんな会話が交わされるようになると、それだけでも慌ただしく、余裕のない気分になります。旧暦でも 12 月だけは、雅号（睦月、如月、弥生というような）がなく、師走というのも、この慌ただしさを誘います。街にはクリスマスソングが流れ、店頭には歳暮用品や歳末用品が賑々しく並んでいる風景も、日本の 12 月の風物詩でしょうか。

「新しいふれあい社会」では、落ち着きのないこの時期だからこそ、互いに心ふれあい温かな、話題を提供したいと考えていました。その願いをかなえてくれた、介護福祉士 M さんのほろ苦くも、心優しい物語を紹介します。

M さん（23 歳）は高校卒業後、社会福祉専門学校で学び、介護福祉士の国家試験にも合格して、市内の介護支援施設に勤務しています。真面目で温和で、利用者の誰からも親しまれています。

そんな M さんですが、認知症の N さんの何気ない言葉で、心を深く傷つけられてしまいました。N さんは病気の性質から人の名前を覚えるのが苦手で、M さんのことも「鈴木さん、山田さん」と毎日のように呼び名が変わっていました。M さんは名前を覚えてもらえなくても個人名で呼ばれるだけで満足していました。ところが或る日、N さんは突然に、M さんに向かって「ミーちゃん」と猫の名で呼びました。それは M さんにとってショックでした。それは卑しめられたということではなく、M さんにとって、忘れることの出来ないトラウマがあったのです。

M さんが高校 2 年のとき、祖母が可愛がっていた猫をからかっていた、表に飛び出させてしまい、折あしく走ってきた車に轢かれて死なせてしまったのです。この猫は祖母にとって、家族も同様の愛着の対象でした。家族はそろってその死を悼んで、ペット専用の墓地に手厚く葬ったのですが、祖母の嘆きは容易に収まらず、食欲も減り、不眠も訴え、「シロちゃんは死んでしまったのよ」と繰り返し、深いうつ状態を示すようになり、ペットロス症候群と診断されました。更に 1 カ月余も経てから「シロちゃんがないのよ」と探し歩くような認知症様症状まで見せるようになりました。このような状態をつぶさに見ていた M さんの心の痛みは著しく、心の底からの許しを乞う思いで、生涯の仕事として、介護福祉士の道に進む決心をしました。

このプロローグのような話を包み隠さず語った後、M さんは、私は N さんを責めているわけではありません。ましてや猫を卑しめているわけでもありません。それにもかかわらず仕事の合間にも、寝る前などにも、ふと頭をもたげてきて、私を苦しめます。笑って済まされる問題だということは、左脳では十分わかっているのですが、右脳が執拗なこだわりから解放してくれません。非科学的な話ですが、車に轢かれて死んだ猫の怨念ではないかとさえ、思ってしまうこともあります。

今さら言い訳めいて聞こえるかも知れませんが、私は入所しているお年寄りのことは誰彼となく、いとおしいと思っています。仕事としても、天職として誇りも持っています。この矛盾をどう捉えてよいのか、自分でも気付いていない心の深層を、心理職の立場から分析してご指導ください、と切々と訴え、最後は涙声になるのです。

（独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業）

私ども後見人の会の〈こころの相談室〉は、ご相談の方の心理判定をしたり、指導をするようなところではありません。あくまで日頃から不安を持っている人の、悩みを打ち明けられる場として、自ら、それを解決しようとする人の自助努力を支えるために設けられています。

その意味で、ご自分の抱えている問題に真正面から真向かい、解決しようという姿勢で、相談に臨まれたMさんに対して、当方でも心ひきしまる思いがしました。その上で、正直な感想を述べさせてもらおうと、Mさんは優しく、真面目で、強い人だと思いました。まるで懺悔のように話してくださった高校2年の時の出来事、それを心に深く刻みつけ、転じて介護福祉士を志して、見事にそれを果たし、天職とまで考えているようなことは、誰でもができることではありません。

「優しく、真面目で、強い人」と評して憚ることはありません。是非ご自分を信じてください。Nさんが、Mさんを猫の名で呼びかけたのは、「猫のように愛らしい人」というイメージで捉えたのではないのでしょうか。おばあちゃんが可愛がっていたシロちゃんの怨念などというようなことは夢々ないと思います。敢えて言うなら、シロちゃんのことを心の奥深くに秘めて忘れないでいる、Mさんの優しさが、Nさんの口を借りて、ミーちゃんの名で表出されたのではないかと思いました。この際に、ご先祖のお墓参りするよう、シロちゃんのお墓を詣でることも心休まるのではないかと伝えました。Mさんは「シロちゃんのお墓参りねえ。もう5年もお参りしていなかったんですよ」と言っただけで、その日の相談は終わりました。

それから2週間後、Mさんから第2報がありました。あれから母とも相談して、祖母を連れてシロの墓詣でをしてきました。祖母は自分の足では遠くまで行けず、車椅子を利用していますが、私が押しての1日かかりのことでしたが、祖母は大喜びで、私の車いすの扱いが上手だと褒めちぎり、「シロも喜んだと思うよ」と繰り返しました。これには私の方が驚いてしまいました。

「シロも喜んで思うよ」という祖母の言葉にしろ、「Nさんの口を借りてミーちゃんの名で私の内なる心を表現している」という先生の解釈も、どちらも猫が絡んでいるようでありながら、人の心の神髄に触れているのですね。しっかり教えられました、としみじみ語ってくれました。

教えられたのは私の方です。言葉は事の端から転じ、言の葉。心のうちをも表す言霊です。

○ 騒がしきことのみ多きこのごろや 夜半に目覚めて猫に物言う 土屋文明

安保反対闘争が激しかった昭和25年、当時の社会を嘆き詠じた連作のなかの一首です。

人は、例えそれが独りごとであっても、相手は猫でも、心のうちを言葉で語りかけるものですね。「言葉は言霊」と言われる所以なのですね。そう、「日本はことだまの幸きわう国」です。

それを、美しく表現した秀歌を見つけました。

○ 寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかさ 俵 万智 『サラダ記念日』

どうぞ、このあたたかさのなかで、慌ただしい師走を和やかに過ごしてください。

## 〈こころの電話相談室〉

心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日 毎週木曜日 午前9時～午後9時

相談担当 榎場主任相談員 電話番号 04-7100-8369 個人情報厳正に取り扱います。

〈それは紙一重の差〉★人生や仕事には悩みや不満やストレスや葛藤がつきものです。それがため込まれ、嵩じてくると、怒りや憎しみに転じる場合が少なくありません。★最近、川崎の認知症高齢者施設、相模原の障害者施設、横浜の終末期患者の病院で悲惨な事件が相次ぎました。いずれも施設関係者などによるものですが、凶行に及んだ背景には相応の社会的・家族的・職場環境的な原因なり理由があるはず。加害者の心理には自分なりの歪んだ理屈もあるのでしょうか。そこに至るまでに、上司や先輩や仲間にも相談していたに違いありません。事件はなぜ防げなかったのか。再発防止策を論じるさいは、その核心部分に切り込んでほしいものです（h）。